
G A C C I ガッチ探検隊

桶乃弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G A C C I ガッチ探検隊

【Nコード】

N 2 8 5 8 H

【作者名】

桶乃弥

【あらすじ】

世の中に渦巻く様々な謎や疑問を解明し、人々の笑顔溢れる人間社会の理想郷、『テンダネスガッチワールド』作りを目指し結成された、藤代道明隊長率いるその名も『ガッチ探検隊』。ある日、隊員の松山が奈良県吉野山に潜むと噂される、謎の人喰い巨大イノシシ『モクセイ』の情報を入手した。ただの都市伝説か？それとも真実か？その正体を探るべくガッチ探検隊がついに始動する！

第一章 「集合」 (1)

煌々と白く光る夜空の月が照らし出すそこは奈良県の吉野山。時刻は午前零時を迎えようとする奥深い山中にもかかわらず、懐中電灯を握り締め二人の男が歩いてきた。おおよそ山登りには似つかわしくない軽装の男たちは、その鋭く冷たい眼光で周囲を凝視しつつ、一歩、また一歩と狭き山道を登っていく。

「おい、本当にこの辺なのか？」

「はあ……。そのはずなんすけど……」

うつそうとした暗闇の森。懐中電灯の灯りだけをたよりに、恐る恐るその目的地を目指して歩く二人。彼らはこの山中にひっそり佇む、とある寺をめざしていた。その寺には歴史的、また文化的にも非常に貴重な由緒ある仏像が、数多く眠っているとまことしやかに囁かれていたのだった。

そうである。地元の住人でも立ち入らないこんな真夜中の山道を、トボトボと徘徊する彼らの真の狙いはその寺に眠る仏像なのである。近年、歴史ある寺の仏像が、何者かによって盗難の被害に遭うという事件が全国各地で多発していた。それら盗まれた物の多くはネットオークションなどを使って転売され、海外のマニアの間で高額に取引されていると言われていた。

ひょんなことからそんな話を聞きつけた彼ら。上手くいけば大金が舞い込んでくると、淡い期待を胸に遠方からわざわざ奈良の山奥までやってきたのだ。何としても寺を発見し、仏像を持ち去ろうと意気込んでいた。

「おっかしいなあ。聞いた話では間違いなくこの辺なんすけど……。間違ったかなあ」

「おいおい、マジかよ頼むぜ」

「スンマセン」

「ったく、お前の中途半端な情報のおかげでこの間も長野でエライ目に遭ってんだからよ！」

「だって兄貴……。まさかあんなデカイ狸に出くわすなんて……」

ね、兄貴、ありゃきつとバケモンですよ」

「もう言うな！ 思い出したくもねえ。オラ、行くぞ」

少々ふてくされた顔をして弟分の男が言い訳がましく独り言をしきりにつぶやくのだった。

五月初旬とはいえ、陽も暮れた山頂付近の吉野山はとても冷え込む。普段は山など登る機会もないであろう薄着の彼ら。不慣れな場所での無謀な探索は、経験不足もたたつてその思考を鈍らせるのだった。

懐中電灯で足元を照らしながら、お目当てのその寺を捜し歩く二人。すると彼らの耳に何やら嫌な音が飛び込んできた。

ゴオオオオ……

まるで山の唸り声かのように、ズシンと身体全体に響く重い感覚。なんとも不気味なその音に、男たちは青ざめ足を止めた。

「何だ？ 今の音」

「さあ……」

先輩格の男は持っていた懐中電灯で付近を照らした。だが、辺りは背の高い木々で覆われており、山道には人はおるか動物の気配もない。男たちは少し安堵した表情を浮かべた。

「何だよ。脅かすなって……」
「兄貴、今日は風がきついっすね」

強風に煽られ、揺れ動く森林が共鳴したのだろう。男たちがホッと胸をなでおろしたその時だった。弟分の男が目前にある小高い丘の斜面に目を配るやいなや、恐れおののいたように引きつった声を張り上げた。

「……ああ、あ、兄貴い。そ、そこに何か居ますよお」
「はあ？ そこってどこだよ」

先輩格の男は弟分の男が指差すその斜面向け、持っていた懐中電灯をゆっくりと差し出す。そしてその斜面を下からなめるようにじわり照らし上げていく。すると、三メートルほど高い場所に、得体の知れぬ物体が灯りに照らされ姿を現した。空をめがけ高く突きあがった大きな鼻らしきものと、二本の鋭く尖った牙らしきもの。部分的ではあるが、懐中電灯の灯りを受け、それらが青白く照らし出されたではないか。

「おい……。何だアレ……」

懐中電灯を持った先輩格の男が驚いてとつさに灯りを消した。すると一気に辺りが漆黒に包まれた。その斜面の方向を暗闇の中凝視しつつ、一步、また一步、弟分の男と押し合いながら後ずさりしていく。そしてその物体から十メートルほど離れた場所にやってくる。男はその全景を確かめるべく意を決した。プルプルと震える右腕を、もう片方の手でギュッと抑えながら、懐中電灯のスイッチを再び入れると今一度その場所をおそるおそる照らしてみる。

「あぁっ……」

「ヒッ」

そこには黒い大きな目をキラキラと輝かせ、今にも彼らに襲い掛からんばかりの形相をした、とても巨大な生き物がそびえ立っているではないか。その時、ようやく男たちはその生き物の正体に気づいたのだった。

「い、イノシシだぁ！」

「で、デカイツ！ バケモンだぁ！」

すると再びあの嫌な音が森の中に響き渡った。

ゴオオオオ……

男たちの耳にその音が入り込むと全身が一気に硬直した。

「オイ！ 逃げるぞ」

「ああ、兄貴っ！ 待ってくださいよぉ！」

男たちは緊張から自由のきかない体を無理やり動かさず、我先にと、のた打ち回りながら漆黒の闇の中を逃げ帰って行くのだった。

第一章 (2)

ちょうどその頃、大阪市内にあるワンルームマンションで、ひたすらパソコンを睨みつけている男がいた。灯りも点けず四畳半一間の手狭な空間の中、スナック菓子をポイポイと口に頬張るやや小太りな男。松山文太三十歳である。

中学、高校とサッカー部に所属していた彼は、その類まれなる運動神経の無さで、部のお荷物と称されていた。しかし、プロサッカー選手への夢が彼の背中を後押しする。やがて高校を卒業した時、彼は初めて六年間無駄に過ごしてしまった時間を思い知ることになる。転職を繰り返し今はコンビニで働くフリーターだ。不規則な生活を送るうち、学生時代はそれでも締まっていた身体も日に日にメタボ気味になっていった。

親や周囲からは「定職にもつかず、いつまでアルバイトを続けているのか」と、冷たい視線を浴び続けてきたこの男。しかし、彼には定職につくという縛られた生き方を極力避けなければならぬ、大いなる使命感があったのである。それはサッカー選手でも、ましてやバイトの延長上で転がり込みそうなコンビニの正社員でもない。そう、日本を変える男になるという死命だったのだ。

凶悪犯罪に政治汚職。この腐りきった日本を変えるために少しでも自分が役に立てることは無いのだろうか。必死に考えぬいた末に出した彼の答え。それは、世間に存在する数々の謎や疑問、そしてそこから端を発する不条理な社会を徹底的に調査解明し、広く世の中に訴え続け、本来あるべき豊かな人間社会を築く事であると……。それがたとえどんなに小さな問題であったとしても、自分を信じ常に物事に対し真剣に立ち向かってゆく姿勢。それこそが本来の人間

らしい生き方であり、それを伝えてゆく事こそこの世に生を受けた自分の使命であると、そう確信していたのだ。

コンビニでのアルバイト勤務を終えて帰宅した今晚も、彼はいつものようにインターネットを駆使し、人々を悩ます疑問を求めてあらゆる分野の情報をチェックしていた。政治、経済、社会、教育、芸能から日常生活まで、彼のインスピレーションが働いた物事にはジャンルを問わずとことんその情報収集にあたる。それが彼の日課でもあったのだった。

ネットサーフを続けること二時間三十分。地域限定のとある掲示板に書かれていたその文章が、彼の目に自然と留まる。彼独自のパラボラアンテナが、その異様な情報をキャッチした瞬間だった。

「……こ、これやつ！」

彼はスツと椅子から立ち上がる。そして思い出したかのように部屋の灯りを点けた。返す刀で手早くプリンターの電源を入れ、今一度なだれ込むように椅子に座る。

「これはきたなあ……。久々のヒットや」

その掲示板に書かれた文章をコピーすると、立ち上げたワープロソフトにペーストしては、補足資料を軽快に打ち込み始める。そうして淡々と『調査企画書』を作り出すのだった。

これまですでに何百件と作り上げてきた調査企画書。その作成は調査内容さえ決まれば手馴れたものだった。ビジネス文書など手がけたことの無い彼ではあったが、こと、この企画書の作成だけは誰にも負けないという自負があった。

打ち込みを始めて数分後、体裁よく仕上げた企画書をモニターで何度もチェックし、納得した表情で印刷ボタンをクリックする。カタカタと弾き出される三枚の企画書を薄目で眺めながら彼は得意げにつぶやいた。

「これは凄いで……、この調査内容ならきつと『隊長』も喜んでくれるはずや」

取り上げた企画書に何度も目を通し、その内容に手ごたえを感じた松山は、早速『隊長』の携帯電話にメールを送る。するともの一分も経たないうちに返信メールが届いたではないか。そこには「よくやった松山」と、簡潔ながらも褒め称える内容の文章が書かれていた。

「どうやら隊長は、この内容に対してかなり気に入ってくれたらしいな」

隊長がこれほど素早い返事をしてきたのは何時以来だっただろうか。その迅速な対応から、松山はさらに自信を深めたのだった。

松山は憧れでもあり、また尊敬する隊長の一行メールを嬉しそうに何度も読み返し、その夜は満たされた気持ちでぐっすりと眠りに就いたのであった。

第一章 (3)

翌日の日曜日。

松山から連絡を受け、大阪市内の喫茶店『アゲイン』に赴いたのは、大学生の西田晃司だった。

ルックス、学歴、恋愛、特技や趣味にいたるまで、どこにでも居そうな平均点の西田。そんな自分自身に彼はどことなく嫌気がさしていた。「何かを変えたい。もつと熱く燃えることがしたい」と感じ続けていた。そんな折ひょんなことから知り合ったのが松山だったのだ。

彼らの目指すものにはじめは興味本位で参加した彼。だが『隊長』や松山らとふれ合ううちに、彼らの志に痛く感銘を受けた西田は共に目標に向かって行動していくことを決意したのだった。

腕時計を何度も見つめ、西田は少々不満げな顔をしてその場に立ち尽くす。彼の待ち人はもちろん松山だ。

「つたく……。また遅刻かよ……」

入隊当事は松山を兄のように慕っていた西田。……が、付き合ううちに松山の少々心もとなない言動に、今ではそのリスクも風前の灯と化していたのだ。

約束の時間から五分ほど過ぎると、西田も流石に苛立ちを隠せない。「先に喫茶店に入っておこう」と、入り口に向かおうとしたその瞬間、後方から松山の声がする。

「にーしーだーくーん！ ゴメンゴメン！ 電車に乗るのが遅れたんやあ！」

息をきらせ小走りで駆け寄ってきた松山に、西田は早速愚痴をこぼす。

「困ります松山さん。せつかくの休みに呼び出されたと思ったら、呼び出した本人が遅刻なんて……」

「ゴメン！ スマン！ 堪忍！」

「いいですか？ 僕らにとって五分の遅れはただの五分じゃないんです！ それが命取りになることもあるんですからね！」

「分かっている！ 許して！」

「ダメです。いつものように遅れた時間分、ココでアレしてください！」

「え？ そんなあ……。駅からダッシュして今着いたばかりなのに……。きついこと言わんと許してえな。この通り！」

「ダメです！ この罰は僕らで決めた規則ですからね。ちゃんと守ってもらわないと規律が乱れます」

「……はあ……。……わかった」

そう言つと松山は諦めたような表情で身をかがめ、喫茶店前の路上でおもむろにスクワットを開始した。

「ハイハイ！ もっと機敏に！」

「ひい！」

街行く人はそんな二人の光景に、「何をやっているの？ この人たち」と、怪訝な顔をして過ぎてゆく。が、松山はそんな冷ややかな視線に動じることなく、ただ黙々とスクワットを続けるのだった。額から噴出す汗をたらし、悲痛な顔の松山に向かって西田が発破をかける。

「松山さん最近ちょっとメタボ気味でしたからね、良い運動です

よー」

「う……くるさい……。フッ……。こ、声をかけるな。……フッ」

「……は……い、四分経過。残り一分。張り切って行こう」

「うひい」

そうしてようやく地獄の五分間スクワットを終えた松山は、息を切らしながらその場にへたり込む。

「さあ、行きますよ」

疲労困憊の松山に対して西田は遅刻常習犯に同情の余地は無しとばかりに、涼しい顔を浮かべ喫茶店に入っていく。

「ちよ、ちよつと待ってえな」

ガクガクと悲鳴をあげる腰を押さえ、ゆっくりと立ち上がった松山もまた、西田の後を追ってもたつきながら喫茶店へと入っていくのだった。

第一章（４）

喫茶店『アゲイン』。今では懐かしくなった純喫茶風の店内は、テーブル十二席、カウンター八席が設けられており、純喫茶の赴きとは異なり意外と広い間取りである。壁一面に張りめぐらされた赤茶けた木目のデザインの板張りが、コーヒーで一服を嗜む人々の心を落ち着かせる。やはり若者よりも中高年が訪れやすい喫茶店だ。

そんな喫茶店を彼らが選ぶ理由。それは、この喫茶店が彼らにとって会議室代わりのようなものだったからである。まだまだ若い松山と西田ではあるが、この喫茶店『アゲイン』の落ち着いた雰囲気、賑やかな若者向けのカフェよりも、これから始める企画会議の場として、かえって好都合だったのである。

二人は中に入ると店員の出迎えも気に留めず、店の隅の窓際にある明るい四人がけのテーブル席にまっすぐ進んでいく。ドカドカと腰をかけるやいなや、持ち込んだ鞆をテーブル上にドカツと置く。そのテーブル席はもはや彼らにとって指定席のようなものだったのだ。もつとも、そんな事は彼らが勝手に決め付けているだけであって、店の者は関知していない。

「いらっしやいま……」

喫茶店のマスターは奥のカウンター越しに彼ら二人を目視すると、「いつもの奴らがやってきたぞ」といった仕草と目線を他の店員に送るのだった。

そう、彼らはあまりこの店のマスターから歓迎されているワケではなかった。おかわりが無料をいいことに、毎度のようにコーヒー一杯でおかわりを続け、長時間居座られては、店としてはたまったものではない。酷いときには開店直後から閉店間際まで彼らにそのテーブル席を陣取られたのだった。

「んで西田君、奈良の地図持ってきてくれた？」

「はい」

「おっ、仕事が早いね」

「……」

「ん？」

「三百八十円」

「えーっ、こんな地図くらい百均で売ってるやろ！」

「ああ？ そーなんすか？」

「あんなあ、探検調査費も今はコストダウンの時代なんや！ どの役人みたいなどんぶり勘定じゃやってられんねん！」

「んなこと言う？ なら自分で買ってきてくださいよ！ 人使い荒いくせに文句ばっか」

渋い顔で小銭を西田の前に差し出す松山。このようにたかが地図一枚で大騒ぎすることはいつものことである。大きな地図をテーブルに広げ、わけのわからない話を店の隅で延々とされる一種異様な光景は、いくら客は神様といえど、悪い印象が残ってしまうものである。そのためマスターにとってあまり好ましい客の部類ではなかったのだ。

とはいえ、彼らは店にとって大切なお客様に違いは無い。また、この店の客入りもそれほど回転率が高いわけでは無く、店に多大な迷惑をかけているとまでは言い切れなかった。マスターにとってジレンマとの戦いがこの日も幕を開けたのである。

店の奥で苦虫をかみ殺す表情を浮かべるそんなマスターの想いやいざ知らず、彼らはいつものように鞆から多くの書類を取り出し、地図と共にテーブル上にどさっと広げるのだった。いよいよ探検企画会議のスタートである。

すると間もなく、まだ十代らしき可愛らしいウェイトレスの少女が注文を取りにやってきた。

「いらつしゃいませ」

ペコリと頭を下げる彼女。しかし乱雑としたそのテーブル上を見て、持ってきたおしぼりやコップの置き場所に戸惑ってしまふ。と、そんな彼女の困っている顔を見て、松山はテーブルの書類を動かしてスペースを空けてやるのだった。

「ありがとうございます」

再びペコリと頭を下げるウェイトレス。いつもは書類などお構い無しに適当にコップを置いていく店員が殆どなのに、そのウェイトレスの戸惑う様子が気になった西田は、ふとウェイトレスに尋ねてみた。

「あの〜君っていつもみかけない子だけど新人さん？」

「え？ あ、はい、そうです。先週から働いています」

「そうなんだ。じゃあこれから僕らココたまに来るからよろしくね」

「あ、ありがとうございます。よろしく願います」

そういうとウェイトレスは深々と頭を下げたのだった。一方、店の奥ではマスターが「よろしくじゃないよ」とばかりにいぶかしげな顔でコーヒーをカップに注ぐ。

西田はいつものようにコーヒーを二つ注文し、ウェイトレスが引き上げてゆくその後姿を横目に見ながら松山に囁いた。

「あの娘……。なかなか可愛い子っスねえ」

「ん、そう？」

松山も何気に可愛い子だと思ってはいたのだが、そんな西田の問いかけに対して興味の無いようにうそぶいた。

「松山さん誤魔化してもダメですよ」

「何が？」

「ああして書類片付けた松山さん初めて見ましたよ」

「うっ……」

「ふっふっくん。やっぱり松山さんも男性ですねえ……」

「う、うるさいな！ てか『ダンセイ』って言うな！」

「まあ体つきは弾性ってカンジっすけどね。へっ」

「ヒトコト多いねん！ 君はっ」

動揺を隠すつもりが、慌てて水を一気に飲み干す松山の行動は完璧に裏目に出る。西田は嫌らしい目つきでニヤけるのだった。

「そんなことより……。会議始めるよっ！」

仕切り直しとばかりに、おもむろに切り出した松山だった。

第一章 (5)

「西田君、今回はねえ……ホンマ凄いよ」

「はあ……。いつも『今回は凄い、今回は凄い』って言って結局ほとんどの企画がボツじゃないですかあ」

またかと呆れた顔で水を飲む西田。しかし、自信で満ち溢れている松山は、誇らしげに昨晚仕上げた調査企画書を西田の目の前に差し出す。

「いやいや、ホンマに今回は凄いで。こんな感覚は入隊して初めてやねん。それくらい手ごたえを感じているんや」

「そうなんですかあ？」

西田は懐疑的な目を松山に送りつつ、その企画書に目を通し始めた。一方、興奮気味の松山は熱っぽく持論を続けるのだった。

「そりや、今まで『イマイチな調査企画やなあ』って自分でも思っことあつたよ。でもな、今回は何となく感じてるんや。『ああ、この調査のために僕らはここまで頑張ってきたんとちゃうんかなあ』って。ホンマそれくらい心に響くモンを感じているんやっ」

西田は「はあ、そうっすか」と、まるで他人事のようにその企画書を読み続ける。そんな投げやりな西田に、松山はとっておきの事実を打ち明けた。

「実はな……昨日の夜、早速『隊長』にこの案件をメールしたんや」「はあ……。で、どうでした？ やっぱボツでした？」

すると松山はニヤリと笑みを浮かべた。その不気味な笑いに西田の表情が引きつる。

「聞いて驚くことなかれ。隊長自ら『早速そっちに行く』って、速攻でメールくれたんや！」

その言葉に西田が驚いた。

「ええ！ マジっすか？ ホントすか？ まさか『隊長』がわざわざ？」

「そうや。どうや？ すごいやる？ それも簡単な調査内容を知らせただけ。企画書のさわりを送っただけやで。どうやらかなりこの企画に興味を持ってきているみたいでなあ。それで僕も確信したワケよ」

「へえ〜。隊長がっすか。……巨大イノシシ……モクセイ……ねえ」

と、その時だ。テーブルに置かれた携帯電話から、大音量の着メロがけたたましく鳴った。それは有名なボクシングを題材にした映画のエンディングテーマ。松山お気に入りの一曲だ。

「おっ。噂をすれば影やな。『隊長』からや。多分調査の日程決める電話やと思うで」

再びニヤリと笑みを浮かべる松山。普段は滅多に電話などよこさない『隊長』。この企画に対する隊長の意気込みを西田もようやく実感したのだった。

「……あ、もしもし。ハイ、松山です！」

意気揚々と電話に出る松山。だが、その笑顔もつかの間だった。

「…………え？　はあ…………。居ますけど…………。わ、わかりました」

すると慚然とした表情で松山は西田に携帯電話を差し出す。

「キミに代わって」

「え、僕ですか？　…………はいもしもし、代わりました西田です。あ、隊長！　おはようございますー！」

松山は『隊長』と会話する西田を見つめながら、嫌味つたらしく咳く。

「…………はあ。キミはええよなあ…………。結構隊長に好かれているかなあ西田君は。…………えっと、今年で二十二歳やったっけ？　…………いやあ若いつてええなあ…………」

松山のそんな発言に、西田は迷惑そうにチラチラ松山を気にしてしまう。何度も睨みを利かせて松山の愚痴を止めようとするが、松山の波状攻撃は延々と続く。尊敬する『隊長』との久々の電話も、集中して話が出来ない西田だった。

「あゝあ、『隊長』もキミのような若い男の方がええんやろうなあ。ひゃっひゃっひゃ」

「ま、松山さんっ！」

二人の妙なやり取りが続く中、先ほどのウエイトレスがコーヒーを持ってやって来る。しかし、松山と西田のその奇妙な会話を前に、そのテーブルに近寄ろうとしない。

傍らで怪訝な顔で佇むそのウエイトレスを横目に見た西田。表情で「ゴメン」と謝りつつ、テーブルにコーヒーを置くよう促す。西

田の仕草にようやくウエイトレスは我に返り、慌ててコーヒーを置くど、ペコリと一礼を残しそそくさと立ち去るのだった。

「いっぺん隊長に抱かれてみればあ？」

松山の発言に西田が辛抱たまらずついにキレた。

「いい加減にして下さい松山さん！ 隊長は僕なんて抱きませんよ！」

西田の怒鳴り声が店内に響く。ウエイトレスの動きが止まり、マスターの口が半開きのまま喫茶店はひと時の静寂を迎えた。西田はそのただならぬ店内の雰囲気を知り、一つ咳き込むと静かに松山を睨みつける。

「松山さんのせいですよ……。恥ずかしい！」

「はふーん。でもさあ、『隊長』とお話できたならそれでも嬉しいんやろ？ 照れんでもええやん」

「あ、あなたって人は……。あ、隊長いやこつちの話です……。もう！ 松山さんのせいで怒られたじゃないですか！」

西田の激高にも知らん顔でコーヒーをすすする松山。付き合っていないと西田は電話を続ける。

「すみません、日程の話ですよ……。はい……。え？」

西田の顔色が一気に青ざめた。

「き、今日大阪に来られるのですか！」

西田のその発言に、松山は思わず「コーヒー」を噴出したのだった。

第一章 (6)

松山や西田が驚くのも無理は無かった。『隊長』は彼らの住む大阪から遠く離れた千葉在住。しかも、昨晚松山から簡単な報告を受けたただけだと言うのに、今日にも大阪にやってくると言うではないか。これほどまでに急な来阪は極めて珍しく、松山、西田ともに動揺を隠せないでいた。

「まいったな……」

松山はボソツと小声で呟いた。そして彼は心の中で叫ぶ。

「これは……。即日探検出発のパターンや……」

何しろ『隊長』と松山はもう十年以上の付き合いだ。この思わぬ来阪の示す答えを松山は瞬時に感じ取っていた。

「困った……。今晚バイトあんのに……。『冗談だ』って言わんかなあ」

だが、これまでの経験上、『隊長』がそんな冗談を言う人間ではないと彼はよく知っている。

「はあ……」

半ば諦めたようにため息をつく松山。ただ、それと同時に手応えを感じていたことも確かだった。今まで幾度となく調査企画書を『隊長』宛にメール配信してきた彼。そのまま音沙汰も無く放置され続けてきた企画書の数々。こここの所そんな自分の不甲斐なさに、悔

しさから自暴自棄になることもあった松山。しかし、今回の案件に対する『隊長』の反応は明らかに違っていた。バイトという現実と、探検への情熱の間でジレンマに陥る松山だった。

電話を続ける西田は、隊長に対して改めて確認する。

「それで、今日は何時ごろ到着されるのですか？ ……僕らですか？ ええ、そうです。大阪で企画会議する時のいつものあの喫茶店にきていますが……」

すると西田の表情が明らかに変化したことを松山は見逃さなかった。

「まさか……」

松山の予感的中し、西田が声を荒げ言い放った。

「はあ？ もう来られているのですか？！ 喫茶店の前？」

その西田の言葉を受け松山はすぐさま窓の外を見る。

「ああ！ 『カエル』やつ！」

道路わきに停車している一台の車が松山の目に飛び込む。見覚えあるド派手なグリーンボディを輝かせた酷炫つワンボックスカー。誰が見ても『それ』と分かる『隊長』の愛車、通称『カエル』だ。

二人がそれを確認したとほぼ同時に『カエル』のドアがスツと開く。すると中から濃い緑色のつなぎを身にまとい、黒のサングラスをかけた長身の男が携帯電話を片手に歩道に降り立った。

「よっっ」

男は窓越しに松山と西田を確認すると軽く手を挙げた。そうである、この男こそ今まさに松山や西田と電話で話していた『隊長』と藤代道明その人なのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2858h/>

G A C C I ガッチ探検隊

2009年10月25日13時49分発行